



CASE STUDY

失敗と向き合う 高校事例

失敗は挑戦の証し。失敗から学べることがある。そうした考えから、「失敗（＝挑戦）」を推奨する取組や失敗を許容する学校づくりを実践している学校を紹介します。失敗と向き合ってきた先生や生徒の言葉は、読者の先生方のヒント、そして勇気となるはずです。

掲げる学校経営スローガンは 「失敗を共に称え合う学校」

地域をフィールドに、地域の人々と生徒がプロジェクトを共創する探究学習に取り組んできた島根県立隠岐島前高校。全国から生徒を募集する「島留学」により、生まれ育った環境が多様な生徒が共に学んでいる。同校では、2022年度より「失敗を共に称え合う学校」を中期の学校経営スローガンに掲げ、失敗を恐れずに踏み込む文化を醸成してきた。スローガンを掲げた背景について、同校でコーディネーターとして生徒の学びや教員の授業づくりに伴走する宮野準也さんは、「学校経営会議で、隠岐島前高校が進化し続けるためには何が必要かを話し合うなかで生まれたもの」と説明する。

地域をフィールドに、地域の人々と生徒がプロジェクトを共創する探究学習に取り組んできた島根県立隠岐島前高校。全国から生徒を募集する「島留学」により、生まれ育った環境が多様な生徒が共に学んでいる。同校では、2022年度より「失敗を共に称え合う学校」を中期の学校経営スローガンに掲げ、失敗を恐れずに踏み込む文化を醸成してきた。スローガンを掲げた背景について、同校でコーディネーターとして生徒の学びや教員の授業づくりに伴走する宮野準也さんは、「学校経営会議で、隠岐島前高校が進化し続けるためには何が必要かを話し合うなかで生まれたもの」と説明する。

教員も生徒も失敗を称え合う 「失敗の日」を開催

フィンランド大使館からのビデオメッセージで幕を開けた第1回の「失敗の日」。午前は通常授業で、教員たちは

CASE

1

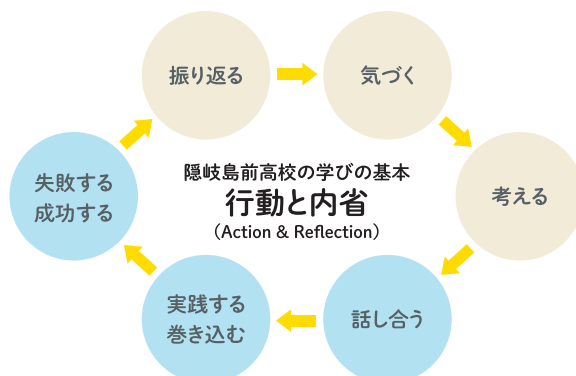
失敗を恐れず踏み込み、振り返ることで
学びを深める、「失敗を共に称え合う学校」へ

隠岐島前高校（島根・県立）

校長 伊藤尚子先生

コーディネーター 宮野準也さん

地域共創科主任 吉岡裕司先生



「失敗おめでとう」とプリントされたおそろいのTシャツを着て授業に臨んだ。失敗共創プロジェクトチームから教員に出されたのは、「授業の導入で、自身の失敗談をしてください」というお題。これが盛り上がり、なかには授業が失敗談だけで終わった教員もいたという。「先生たちが失敗談をイキイキと話す姿が印象的でした。倫理の先生の恋愛の失敗談を聞いたことで、倫理の授業



1 過去の失敗経験を語り合い称え合うグループワークの様子。最後には「踏み込み宣言」をした。2 フィンランド大使館からのビデオメッセージが流れ、一気に沸く会場。3 地域の人も交えた踏み込みワークショップの様子。4 おそろいの「失敗おめでとう」Tシャツに身を包む教職員たち。



の受け止め方が変わったという生徒もいたりして。先生の意外な一面が垣間見えて、生徒が先生を、先生としてではなく一人の人として受け取った時間になりました（宮野さん）

続く昼食は「踏み込みランチ」と称し、各学年の生徒と先生の4人1組で食事をとる形式に。普段は関わることの少ない異学年の生徒や先生との交流は新鮮だったようで、生徒からは「話したことの新しい先生と話せたのが良かった」「先生との距離が近くなった」という声が多数寄せられたという。

さらに、昼休みには失敗共創プロジェクトメンバーの教員が失敗談を語る「失敗ラジオ」、午後には同校の卒業生であるタレント・井手上 漠さんの「失敗講演」が行われた。講演後には、生徒と教員が過去の失敗経験を語り合い称え合うグループワークを実施。失敗を称え合う先にある「未来に対して失敗を恐れずに踏み込む」という本来の目的を達成するため、最後は一人ひとりが「自分がこれから踏み込みたいこと」を宣言した。

グループワークの企画・運営には、生徒会のメンバーも参画した。各グループのファシリテーターは3年生の生徒が務め、未来に向けた踏み込み宣言がしたいというのも、生徒から出た意見だ。「最後にみんなで円陣を組んだときに、普段はおとなしい印象だった生徒会の生徒が先陣を切って大きな掛け声をかけていて、思い切った踏み込んだんだと嬉しく思

った」と振り返る。

やりたいことを口にすると、応援してくれる人が現れる

第2回（2023年度）、第3回（2024年度）と、「失敗の日」の取組は企画のリニューアルを重ねて継続中だ。生徒が自分の好きなものについて語る「偏愛授業」でタレント・西野亮廣さんへの思いを表現した生徒が、その後、交渉を重ねた結果、翌年の第3回に西野さんの講演が実現するなど、生徒の踏み込みが生徒自身の力によって実ったケースも。また、出身地（島根県浜田市）に伝わる石見神楽と隠岐島前に伝わる島前神楽が共演する舞台を作りたいたと踏み込み宣言をした生徒が、地元住民をはじめさまざまな人の協力を得て舞台を実現させたこともある。

「結果的にはやりたいことが実現できた生徒も、その過程ではうまくいかなかったことや失敗をたくさん経験し、そのたびに振り返って次の踏み込みにつなげていった。自分のやりたいことを口にすることで、応援してくれる人が現れる。そして、言ったからには実現しないと……という良いプレッシャーが生まれる。自分の踏み込みをみんなの前で宣言することの意味を、感じてくれたのではないかと」と生徒の姿から推測する。

第3回の「失敗の日」は、企画・運営を生徒の有志チームに任せたものの、「前例踏襲感が強く、失敗の日を失敗した。私たち大人の委ね方が雑で、生

徒が戸惑ってしまった」と宮野さん。一方、「失敗の日自体、踏み込みと振り返りで改善していくもの。まず、大人が手放して、生徒主体でやってみると踏み込んだことに価値がある」と前向きだ。中心となった生徒たちとは、振り返りもした。「生徒たちからは本音がポロポロ出てきて、悔しい、今年の失敗を活かして来年はもっとがんばりたい、と。生徒に任せつつ、いかにパスを出すか、いかに伴走するか、私たち大人の探究も続く」と次回に向けて意欲を見せる。

日常のシーンで体現・発信することが、文化の浸透につながる

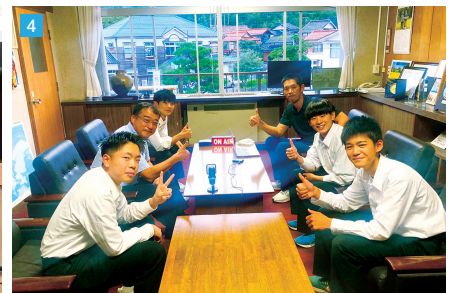
「失敗の日」は年に1回のイベントであり、失敗を恐れずに踏み込む文化の醸成は、これだけでは難しい。さらに、離島にある隠岐島前高校には若い教員が派遣されることが多く、全教員の約3分の1が入れ替わる年もあるほど異動者が多いという課題もある。宮野さんは「文化の浸透において大事なことは日常のシーン。踏み込みや振り返りにこだわる学校なんだということが自然に感じ取れるよう、意識的に行動・発信している」と言う。

失敗の日に取り組んだ1年目は、イベントが盛り上がった勢いで、「それって踏み込んでないじゃん？」「もっと踏み込みうぜー」といった会話が職員室でも頻繁に交わされていたという。一方、教員やスタッフの入れ替わりがあるなか、熱量は次第にトーンダウンしていった。「踏

3回の「失敗の日」で実施した主な企画 /

- 生徒による踏み込み授業「偏愛授業」
- 教員の失敗を恐れない踏み込みチャレンジ
- 地域の大人による失敗発表会
- 未来への踏み込みワークショップ
- 失敗の価値を考えるワークショップ
- 踏み込みランチ／失敗ラジオ

1・2「踏み込みランチ」の様子。普段は関わることの少ない、各学年の生徒と先生の4人1組で、校内の思い思いの場所で昼食をとった。3 隠岐島前高校の卒業生であるタレントの井手上 漠さんがサプライズで登場。自らの失敗経験を語った。4 失敗ラジオの収録風景。



失敗を称え合う関係性には、 心理的安全性が不可欠

失敗を恐れずに踏み込む文化は、校内にどれほど浸透しているのだろうか。学校の空気の変化について、同校に赴任して6年目を迎える吉岡裕司先生は、「生徒間でも教員間でも、誰かがやりたいと言ったことに対して、やってみればいいじゃん、と返す空気がある」と言う。

「周囲の反応がポジティブなので、みんながやりたいことを内に秘めずに口に出せるんだと思います。失敗を称え合える関係性の大前提として、生徒も教員も自分を開示することが大事だと思うんです。相手のことを知りたけ

れば、まずは自分を開示しないといけません。本校では、自らをさらけ出せる、出そうとする、そんな雰囲気があると感じます」(吉岡先生)

現在、地域共創科3年生の担任を務める吉岡先生。生徒から「お互いに何を思っているのかも」と知りたい」という声が挙がり、終礼で「一人ずつスピーチをすることになった。2年次の3学期から始めて数カ月が経ち、「生徒にとってクラスが、安心できる場になっている」と感じている。「日々感じていることや好きなものについてお互いに共有すること、つまり、自分を知ってもらい相手を知ることが、一人ひとりの気持ちを楽にするんだと実感した」と吉岡先生。突拍子のないことをやりたいと言っても否定されない安心感がある一方、その関係性に甘えてはいけなさと、気の置けない関係であったとしても丁寧なコミュニケーションが大切だということも、生徒には伝えている。

実は吉岡先生も、終礼のスピーチで自分自身の経験を開示したことがある。語ったのは、地域の小学校で理科の実験講座をやった際、「割れないシャボン玉」を作るはずが割れ続け、小学生に同情された…という失敗談だ。

「私にとっては心に引っかかっていた失敗だったんですが、生徒に話し、生徒がいい失敗じゃないと笑ってくれたことで、なんだかスッキリしました。教員は失敗したらダメな仕事だと思ひ込みがちで、つい生徒の前でバリアを張ってしまう

れ、まずは自分を開示しないといけません。本校では、自らをさらけ出せる、出そうとする、そんな雰囲気があると感じます」(吉岡先生)

現在、地域共創科3年生の担任を務める吉岡先生。生徒から「お互いに何を思っているのかも」と知りたい」という声が挙がり、終礼で「一人ずつスピーチをすることになった。2年次の3学期から始めて数カ月が経ち、「生徒にとってクラスが、安心できる場になっている」と感じている。「日々感じていることや好きなものについてお互いに共有すること、つまり、自分を知ってもらい相手を知ることが、一人ひとりの気持ちを楽にするんだと実感した」と吉岡先生。突拍子のないことをやりたいと言っても否定されない安心感がある一方、その関係性に甘えてはいけなさと、気の置けない関係であったとしても丁寧なコミュニケーションが大切だということも、生徒には伝えている。

隠岐島前高校が目指す教師のあり方



転ばぬ先の杖は渡さず、 生徒自身に試行錯誤させる

ですよね。でも、それでは相手も自己開示をしてくれません。自分が本音を話すこと、自分をさらけ出すことで、生徒も本心を見せてくれるのだと思います」(吉岡先生)

今春、隠岐島前高校に校長として赴任した伊藤尚子先生も、同校の「じやあやってみますか、という雰囲気驚いた」と言う。

「譲れない部分はあっても、世の中の変化に合わせて、学校も変わっていくといけません。しかし、多くの学校には、今までこうしてきたから今回も…という前例踏襲の文化が根強く残っています。本校には若い先生が多く、コ

生徒の声(アンケートより)

■今までは「踏み込まない＝停滞」と考えていたが、踏み込んでマイナスになったとしてもそこから学ぶことがあるのだから、「踏み込まない」という選択をすることは、学びのチャンスを失うという意味においてマイナスだと思うようになった。

■自分の失敗を語ることによって、失敗もある意味成功だったことに気づけて良かった。

■今まで失敗は悪いものだと思っていたけど、失敗が悪いのではなく、それを次に活かさないことが悪いと思うようになった。



1 上半期の踏み込みを振り返り、共有するワーク。2 「偏愛授業」でタレント・西野亮廣さんへの思いを語る生徒。3 西野さんの講演を実現するため、クラウドファンディングに挑戦し、達成。4 翌年の「失敗の日」に実現した西野さんの講演の様子。

ディネーターや寮のハウスマスターなど教員以外のスタッフも多く、多様な意見が出て、かつ、機動力が高い。新しいことに挑戦し続けようという空気をひしひしと感じています。現状維持は後退であると肝に銘じて、失敗云々ではなくとりあえずやってみる。これを私自身の踏み込みとしたいと考えています(伊藤先生)

また、「これまで教員は、生徒が失敗しないよう、こうしたらいいんだよとレールを敷いて道筋を示してしまいがちだった」と伊藤先生。「これからの時代は、時に待ち、時に導きながら、失敗も含めて生徒自身に試行錯誤させることが大事なのではないか」と提議する。これを受けて、「こちらが準備した道を生徒がその通りに歩むことで安心していたのは、自分たち教員だと気づいた」と吉岡先生。きっかけとなったのは、ある生徒のひと言だった。

数年前、3年生の担任だった吉岡先生。なかなか進路が定まらない生徒に対して、進路の情報を集め、提案するなどして熱心にサポートしていた。しかし、ある日、その生徒が「進路を決めないことを決めた」と宣言。一体どういうことだと驚いた吉岡先生が、突き詰めて考えて行き着いたのが、「生徒のために良かれと思ってやってきたが、実は自分が安心したいからやってたことであり、生徒のためになつてはいないのではないか」という気づきだった。その生徒は、最終的に自分で進路を決めた。「生徒が転ばない

ようにと先回りして準備をしていたけれど、違ったなと気づかされた」と吉岡先生。そこからは、「探究学習でも進路選択でも、自分の焦りから生徒を急かしたり誘導したりしないよう、生徒が自ら納得感をもって次に進めるよう、待つことを意識するようになった」と言う。

失敗は世代を越える！ 生徒も教員も踏み込む学校に

生徒の踏み込みを後押しし、実際に多くの生徒がさまざまなことにチャレンジする姿を見て、「負けたくないと思つた」という吉岡先生。昨年、JICA(国際協力機構)が主催する教師海外研修に応募し、夏休みの10日間をラオスで過ごすという「踏み込み」を実践した。帰国後は、学園祭や授業の中で、ラオスでの経験やラオスについて話をする機会が何度かあった。「大人が勇気を出して踏み込む姿を見て、生徒たちも何かしら感じてくれただろうと思う」と期待する。

学校の中で失敗を許容しにくい背景には、保護者からの目に見えぬプレッシャーもあるだろう。我が子の未来への漠然とした不安の矛先が、高校や教員に向けられることも往々にしてある。「保護者vs学校」という対立構造ではなく、「子どもを真ん中に置いた共創パートナー」という関係性を構築することが、「失敗を共に称え合う学校」の実現には不可欠である。そう考えた宮野さんは、今年度より新たな取組をスタート

させた。その名も「保護者のはじまりの会」。1年生の保護者を対象に、入学式の1週間後にオンラインにて開催した。

同校では島前地域外から通う生徒は寮生活をしており、「保護者自身も、我が子を離島の高校に送り出すという大きなチャレンジをしている」と宮野さん。「入学直後は、生徒だけでなく保護者にとっても大きく環境が変化する時期。この時期に改めて隠岐島前高校の保護者としてのマインドセットをすることが大事だと考えた」と言う。会では、今の心境を互いに共有する時間をもつたうえで、保護者としてどうありたいかをそれぞれが考え、最後に宣言した。「保護者からも好評で、共創パートナーとして共に歩み出す一歩になった」と宮野さん。今後は、保護者も含めた「失敗を共に称え合う学校」づくりを進めたいと、意欲を見せる。

「失敗を共に称え合う学校」をスローガンに掲げ、折に触れて「失敗」の価値を問うなかで、今、「失敗は世代を越えられるのでは？」という仮説が、宮野さんの中で立っていると言う。

「先生たちが過去の失敗談を楽しそうに話す様子を見て、失敗は世代を越えて対話のテーマになり得るのではないかと考えるようになりました。社会の第一線で活躍している人にも失敗はあるはず。今後は、高校という枠を越えて、失敗をキーワードに地域や社会までつながりを広げていけるといいなと考えています」(宮野さん)